

『大村はま 優劣のかなたに』 荻谷夏子 筑摩書房 より ①

見るに見かねる

(子どもが)投げやりな気持ちを見せてたり、あきらめたような、これから何十年と人生を生きる人と思えないような、退廃的な顔つきとか目つきを見ますと、私、とてもそれを見てることができないんです。……見るに見かねるということでしょうか。それでまあとびつくという感じで、身も寄せましたし、いろんなことを、これでもかあれでもかと何かしたのです。それを考えるときに、それがいい方法なのか、だめなのか、とか、あまりそういうことを考えていたのではないのです。わるくてもよくてもしょうがないんですね。……知恵の限りをしばって、短い時間に胸をドキドキさせて、手を打ちますね。……そういうところから方法というもののは生まれてきたんですね。
(「はまゆう」第18号)

大村は、自分はもちろんのこと、子どもでも、ほんとうにやるべきこと、価値のあること、やると決めたことに一生懸命に励み、そのためにどれほどの苦労があろうが、つらかろうが、いつとき泣こうが、それで怯むような人ではなかった。苦労をあたたく見守る目はもっていたが、それでストップをかける人ではない。そういう点ではなんとも勇敢な人だ。

けれども、その反対に、目の前に何の苦労も苦痛もないとしても、いきいきとなにかに取り組むという気持ちから遠ざかり、投げやりな、生気をなくしてしまったような表情を見せられたとき、大村はほんとうに弱かった。「私は、自分でも異常ではないかと思うことがあるほど、ひどく辛く、じつとしていられなくなる」「度はずれ」と言っている。おろおろと、こうしたらどうか、ああしだらどうか、たとえばこれならどうだろう、と、思いつく限りの手をどんどんと打っていった。なんとか、張りのあることに出会わせたい、いきいきとした子どもであってほしい。まるで生理的でもいえそうなくらいに切ない願いだった。誰にでも弱点はあるが、この「子どもの退廃的な顔つき」というのは、まさしく大村の最大の弱点だった。

「子どもの顔が真面目でも笑っていても、そんなことに関係なく、心の活躍している顔と、心の眠っている顔とを、さっと読み取らなければならないと思います。……何らかの手を打つのです。……「今日は元気がないなあ」などと言わずにです。そんなことを言うともっといやな気持ちになります。そんなことは何も言わないで手を打つことです……。先生は必ず動くべきです。」(『教えながら教えられながら』)

精根尽きるほど力を使えばいい、それで失敗することも一向にかまわない。見守っていよう。けれども、とにかく、子どもが心の眠ったような、投げやりな目をしていたら、もうぜったいに放っておくわけにはいかない。教師である自分は教室で、本腰をいれて子どもに向かい合って、「知恵の限りをしばって、短い時間に胸をドキドキさせて、手を打」っていくしかない—そうやって大村は過ごしてきた。そして、やむにやまれずに急場を打開しようとして打った手が、書斎の机の上で理屈をこね回していても決して生まれえないような、不思議な突破力を持った方法だったということだ。

この「これから何十年と人生を生きる人と思えないような、退廃的な顔つき」や「心の眠っている顔」を読み取るということは、大人として相当に大切な、ひょっとしたら一番大切な、といってもいいような感性ではないだろうか。それらを察知できないで、投げやりな気持ちでいる子どもを、おとなしくしている限り誰の邪魔にもなっていないからと、ただ放っておくとしたら、それは、いきいきとした魂をもった子どもの一部分が壊死しそうなのを、放置しているようなものなのではないのだろうか。

『大村はま 優劣のかなたに』 荻谷夏子 筑摩書房 より ②

私に似なさい

範を示すっていうことが嫌いになったのか、非常にしなくなりましたね。……昔は、「私に似なさい」ぐらいの気持ちでやっていたんですから。

今は、「私に似なさい」なんていう態度はいけないことみたいになっていますけれど、だから子どもはどっち向いてやったらいいか、わからないのではないのでしょうか。

(『教師 大村はま 96歳の仕事』)

「自分で自分の道を切り開く、誰に学ぶということもなく、自分一人の力でなにかを築いていく、そういう生き方もいいでしょうけれども、師を持つ人の良さというものは、確かにありますよ。それは大きな幸せだと思いますね。芦田恵之助先生も「師のない者は育たない」とおっしゃっていた」と、大村は言っていた。実際、生涯にわたっての師をしっかりと持っていた。

そして大村は私の師だ。たった半日の入院の後、大村はまが急逝したとき、私はしばらくのあいだ茫然としたが、落ち着くにつれて、この「師を持つ幸せ」というものを、遅まきながらようやく実感するようになった。自分の中に、一つの信頼できる軸というか、芯というか、規範というか、そういうものが、「師」という形でしっかりと存在していることを感じるようになった。堂々たる一人の人としての師が、「私に似なさい」と言ってくれる安心感である。

大村が昭和三年、二十二歳で最初に教壇に立ったのは、信州の諏訪高等女学校(現・長野県諏訪二葉高等学校)だった。いつもきりりと白い足袋をはき、美しい口跡で授業を進める若い女教師は、すぐに生徒からあこがれの目で見られるようになったらしい。昼休みには生徒と一緒に外で遊び興じたり、おしゃべりしながら小さな手鞠を作っては、子どもたちに一つずつ贈ったりしていた。授業の前には、生徒たちが職員室までにぎやかに迎えに来て、教科書やら作文の束やらを奪い取るようにして運んでくれた。そういう親しみが広がる一方で、教室では凜とした美意識に貫かれた授業をした。

ある時期、大村は書道の先生も兼ねていて、生徒全員に、それぞれの名前と住所を書いたお手本を配った。また、正月には、新しい年に「大切にしたいことば」を持つようにさせ、一人ひとりの「大切にしたいことば」を、ていねいに筆で清書して与えていた。多くの生徒が大村の書いた名前のお手本と大切なことばを文字通り座右に置いて、朝に夕に眺めたのだという。それで、諏訪高女には、大村とそっくりの字を書く生徒が続出したと聞く。

「大村流」と呼ばれたらしい。卒業して何十年経っても、卒業生の間に大村流の字は残り続けているのだという。卒業生が手紙をやりとりすると、大村流の字が行ったり来たりする。

晩年の大村の仕事を手伝うようになったことで、私がいろいろな機会に文章を書くと、大村は励ます意味もあってずいぶんと褒めてくれた。「あなたの文章には、新しい時代の空気を感じる。変に凝ったところがなく、ずんずんと前へ進んでいく、気持ちのいい文章だ」と、申し訳ないくらい褒めてもらった。ところがある日、大村は、いかにも愉快そうに笑いながらこう言ったことがある。

「探している資料があって、むかし書いた私の本を読み返していたらね、若い、元気な頃の私の書いた文章が、今のあなたの書く文章の調子にそっくりなのよ。ほんとうに驚いた。どっちがどっちに似たんでしょう！」……私が先生に似たに決まっている！

真似ということは、ちょっと価値のさがることというような調子で扱われることが多い。けれども、あこがれるくらい大きな存在の先生がいて、悠然とした姿で高い力量や広々とした見識を示してくれたら、それをまねることは、幸せなことで、恥ずかしがることもない。無駄にうろうろしなくてすむだけでも、どれだけうれしいだろう。

「私に似なさい」と堂々と言える教師が、それぞれの子どものまわりに一人くらいはいてほしいものだ。

『大村はま 優劣のかなたに』 荻谷夏子 筑摩書房 より ③

子どもたちが参るような

女の先生だと思ってばかりにして騒ぐというようなとき……「静かにしなさい」とか「何して
いるんですか」とか、そういうことを言ったのではだいたいだめなんです。そういう子どもは
もう知らぬ顔をしておくのがいちばんよくて、そういうときには、クラスには必ずしっかりし
た子どもたちがおりますから、そのしっかりとした、それも男の子たちに着目して、その子た
ちが参るような、ほんとうのいい授業をすることなんです。そうしますと、その子たちが満足
を覚えますね。そうなるとその子たちが必ず騒ぐ子どもたちを静めてくれるものなのです。な
にを言ってくれるというのでなく、雰囲気で騒げなくしてしまうといったらいいかもしれませ
ん。

騒ぐほうをいっしょうけんめいしかって、ヒステリーみたいな声を出してやりますと、その
しっかりとした男の子たちが、つまらなくなり、……そむいていくわけです。

(『国語教室の実際』)

教室の生きた呼吸がわかるようなことばだ。なるほど、と思う。

しかし、である。なにゆえに「男の子」か、「男の子」限定か、と、元女の子であった私は、思
うのだ。なぜ「そのしっかりとした、それも男の子たち」なんだろう。なんとなく悔しい。大村
が、亡くなるまで掌中の珠のように大事にしてきた教室の物語の主人公は、なぜか男の子が多い。

読書論をいくつも読んで、自分たちの読書生活を振り返り、本について、読書についての見識を
みがくという単元を終えたときのこと。遠慮がちに、静かな声で「大村先生の読書指導は、ちょっ
と、古かったのでは、ありませんか」と言った男の子。

文法のような分野に単元学習は向かない、という常識があるなか、一念発起して、工夫に工夫を
重ね、十分に練り上げた文法の単元を作った。大村が夢中になってリードして、
やはり思ったとおり、文法でもこんなに生き生きとした学習ができるのだ、と満足して終えたとき、
「ストレートに教えてください」と要望してきた男の子。

老人の日(敬老の日の前身)に、五十歳を目前に、老いを感じ始めた大村が「今日は老人の私を悲
しませるようなことをしてはダメですよ」と、半分いたずらのような気持ちで言ったとき、最前列
から大きな声で「老人って思ってなあいもん」とすぐさま返した男の子。

そんな話はまだまだある。どの逸話にも、大村をはっとさせることばを持った、真っ直ぐなまな
ざしを光らせた男の子がいる。

自分のことを考えても思うのだが、どうも、女の子は、相手の期待の幅の中で、自分の言動を決
めるようなところがあるのかもしれない。良い関係を維持したいと思うと、無意識にかもしれない
が、相手の意に添うということを考える。これなら喜んでもらえるだろうか、というような規準を
相手の中に探りながら、対応していく。

他方で、男の子は、そういうふうに相対的に自分を決めていくというようなところが、少ないの
かもしれない。無骨に自分の立ち位置からものを言うような、そんなおもしろさがある。だから、
女の子のしっかり者と、男の子のしっかり者では、できる仕事に差が出てくるのではないだろうか。

大村は、自分の考えの幅を悠然と裏切るような男の子を、ほんとうに、おもしろく、楽しみに見
ていた。とくに、学ぶ人として、考える人として、自分を乗り越えていくような声が聞かれると、
驚きの一瞬後には、頼もしく思い、心底よろこんだ。(中略)

そうだ、女の子が主人公の話もないわけではない。

退職前年のこと。「私の本」という書き込み式の文集を、大村が作った。思わず書く気を誘う工
夫がどのページにもほどこされていて、さまざまな種類の、テーマの、着眼の文章が自然と並ぶよ
うにできている。大切な注意などは、生徒が自分で見ればちゃんとわかるように、要所要所にさり
げなく示されている。ああ、それなのに！新しいその取り組みがうれしくて、大村は気持ちが弾み、
つつい長話をして、言わなくてもわかるはずの注意や説明などを加えてしまった。で、ようやく
話が終わってこれでやつと個人作業に入れる、というときに、ある女の子が言ったのが、「ああ、
うるさかった！」。

勇敢な女の子もちゃんといて、大村のコレクションに花を添えた。

『大村はま 優劣のかなたに』 荻谷夏子 筑摩書房 より ④

気がすまないのです

生徒というものは、先生を試すものです。……

……先生をいびって、快感をおぼえたいという欲望があつてやったことなのですから、こっちが多少傷つかないと、気がすまないのです。……

ちょっと傷ついてやってください。具体的には、ちょっと見るといいのです。こわい顔はしないで、ちょっと見るんですね。多少傷ついたということを、ちょっと知らせて、そしてあとは知らん顔すればいいのです、それ以上のことはありません。

……学習記録なんか、骨が折れるでしょう。カタカナで「オオムラセンセイシネ」と書いてあったことがあります。
(『教室に魅力を』)

学校は夢の文化の国ではない。おとなの社会といくらも変わらないような現実が、学校にもちゃんとあり、多くの教員が、教科を教えるということ以前に、子どもを率いることに大きな問題を抱えている。そういう人から見ると、大村の実践は、立派だともすごいなとも思うけれども、かけ離れた、別の世界のここのようにしか見えない、ということがあるようだ。そもそも、時代が違う。二十一世紀の今、教育や教養への敬意がさらに下がり、おとなを権威と認めない子どもが増え、家庭もあてにできず、教師の行動もこまかく規制されている、授業時数も大きく減った。そういう中では、非常に文化的な雰囲気の大村教室は、遠いあこがれにはなっても、あまりに遠すぎて、手本にも参考にもならない……。

時代が違うということを、歯をくいしばってでも、言いたくない。もちろん、違うのは事実だ。時は移り、社会環境は変わっていく。けれども、「時代が違う」と言ってしまうたら、重要な指針となる可能性のあった実践は、その瞬間に音もなく遠くに去り、博物館のガラスの向こうの展示品になってしまう。私は、強情に、頑として、時代が違うとは言わない。

大村は、ずっと一教員として、その時代その時代の困難の中にいたといっている。昭和二十年代には、間借りはおろか、畳借りという家庭環境も見、自身も母親と共に学校の物置に住んでいた時期があった。万引きが多発し、教師が頻繁に警察に出入りするという環境にもいた。そういう中で、大村は、教師の本来の仕事は「教室で教える」ことであって、だから、存在意義の中心も誇りの中心も、授業にあるのだということ。子どもたちも、一日数時間も過ごす学校という場において、大半を占める授業それ自体がおもしろく感じられなければ、他でどう楽しませようと、心からは満足しないこと。なぜなら、どんな子どもも、分厚い爽雑物の下に、わかるようになりたい、いろいろなことができるようになりたい、という意外なくらい健気な気持ちを、本来的にもっているのだということ。この三つのことを、揺るぎのない信念として持っていた。戦後の混乱をしのいだ人だから、その揺るぎのなさは筋金入りである。

事実、大村は、いい授業をすることで、子どもをしっかりとつかんできた。あの、大まじめな、骨身を惜しまない、一心な姿を見ると、子どもでも、気持ちが少し静まってくるような感じがした。そういう感性は、「子どもでも」ではなくて、「子どもだからこそ」なのかもしれない。身を粉にして自分たちを教えようとする人、空虚に命令するのでなく、手をひいて高いところに連れていこうとする人、たてまえでものを言わず、心からの声を出す人、考える面白さ、わかる面白さを、チラッとでもほんとうに見させてくれる人。そういう人の前で、荒れる気持ちや不満な気持ちが、少し風ぐ。(中略)

冒頭のことばは、それでもいろいろなことがあったのだなあ、と感じさせる。「先生をいびって、快感をおぼえたいという欲望があつてやったことなのですから、こっちが多少傷つかないと、気がすまないのです」という言い方に、おとなとしての少々のことでは慌てない落ち着きと覚悟が感じられるし、また、子どもの気持ちへの理解を見てとることができる。シネなんて書かれれば、もちろん不愉快な気持ちも寂しい気持ちもとっさには抑えられないわけだが、それを自分の中で処理して、感情的にダイレクトに子どもに返すことはしない。だが、その一方で、すべての感情を自分の内側で納めてしまって、なにも反応しない、平気な顔をするというのでは、子どもとしても満足できない。憎たらしさが増すばかりになる。人と人として向かい合っているのだから、一方が傷つけたら、一方は傷つく。それが不自然に隠されたらかえってよくない。コントロールした球を投げ返すようにして、「シネ」ということばに読みましたよと「/」印をつけて「多少傷ついたということを、ちょっと知らせて」というのである。

ああ、そんな反抗はかわいいもんで、今はそんなもんじゃありませんよ、という声が聞こえてきそうだが、時代が違うと言ってはおしまいだ。

『大村はま 優秀のかなたに』 荻谷夏子 筑摩書房 より ⑤

教師の資格

「研究」をしない教師は「先生」ではないと思います。まあ、今、ではいくらか寛大になって、毎日でなくてもいいかもしれないとも思ったりしますが……。子どもというのは「身の程知らずの伸びたい人」のことだと思うからです。……一步でも前進したくてたまらないのです。そして、力をつけたくて、希望に燃えている、その塊が子どもなのです。……研究をしていて、勉強の苦しみと喜びをひしひしと、日に日に感じていること、そして、伸びたい希望が胸にあふれていることです。私は、これこそ教師の資格だと思います。(『教えるということ』)

生徒の目から見て、大村教室のいったい何がそんなに特別であったか、ということ振り返ったとき、この教師の研究的な姿勢というのが一番に挙げられるような気がする。大村が、すでに出来上がった、固まった、出す一方、与える一方の人ではなく、もっと、もっと、と大変な思いをしながら勉強し、研究する人だった、その精神的若さが、確かなものとして感じられる教室だった。考え考え、工夫しいしい、これでいいのかな、どうかな、今度はこんな工夫をしてみたけれど、どう？ どうかこれでうまくいきますように、そんなようすの教師であったこと。そんな人がほんとうに未熟で頼りなかったら心配だが、実際には堂々たる実力の持ち主であったこと。この組み合わせが、生徒にとっては、ほんとうの意味での信頼のもとになっていたと感じる。

生徒にとって、大村単元学習は、正直なところ、たいへんだった。いつも一汗も二汗もかいて、楽に一丁上がりということはほとんど考えられないことだった。そのために、ほんとうに真面目に真面目から引き受ける生徒にとっては重すぎて、苦しいという気持ちが大きかったかもしれない。大村自身は、学習に軽みを持たせることを意識していたのだが、やはりその取り組みの壮さや程度の高さに、プレッシャーを感じる生徒は出た。それであっても、なぜ、みんなが揃いも揃って、拙いながらも、はあはあと苦勞しながらも、ついていったのか。こんなやってられないよ、と投げ出す子どもが続出しても、ちっともおかしくなかったのに。

前に、大村を取り上げたテレビ番組を作った NHK の若いプロデューサーが、「教室を撮った古い映像を見ると、不思議な気がする。なんでみんな、ああ素直に一生懸命になっているのかなあ。特別素直ないい子ばかりが集まっていたのかなあ。それが奇妙な感じがする。僕があそこにいたら、あんなふうにはのっかっていかなと思うんだけど」と、本音のことばをもらした。そう思うのももっともだ。

映像に映っていないのは、大村が、教室のすみずみまで工夫と配慮をして、もっと高く、もっといきいきと、と研究し続ける、その前のめりの姿勢なのだ。現役選手だけがもっている若々しい勢いと、現役同士という共感なのだ。それが、テレビの画面にはなかなか映らない。でも、生徒からは見えていた。新しい単元の一式を抱くように持っていそいそと、教室に出る、こんないい材料があったと誰よりも喜ぶ、なぜもっと本気を出さないのかと歯がみする、慎重にいかにも大事そうに作業手順を伝える、きりりとした顔で発表を聞く、便利な文房具が発売されたと小躍りする、そういう小さな日常に、大村が研究と勉強の現役であることはくっきりと表われていたのだ。私たちは、現役先輩の言うことは、聞く気になった。

冒頭の記事で省略した部分はこんなふうになっている。

「勉強するその苦しみと喜びのただ中に生きているのが子どもたちなのです。研究している教師はその子どもたちと同じ世界にいます。研究をせず、子どもと同じ世界にいない教師は、まず「先生」としては失格だと思います。子どもと同じ世界にいたければ、精神修養なんかでは、とてもだめで、自分が研究しつづけていなければなりません。研究の苦しみと喜びを身をもって知り、味わっている人は、いくつになっても青年であり、子どもの友であると思います。」

考えれば、白寿記念講演で大村が挙げた五つの忘れ得ぬことばの一つが、母の言った「裾を持ちなさい」だった。一つのことをしっかり押さえておけば、そんなに無理をしなくても、考え込まずとも、自然に事が叶う、そういう方向が大村にとっては、生涯で五本の指にはいる大事なものであった。

教師は研究を、というのも、それをほんとうに実行していれば、「精神修養」などで無理にがんばらなくても、自然に、教師が子どもと世界を共有できるからだ。土台の部分はどうも苦勞だらうけれども、結果がいつかは自然に手にはいるだろうと、安心していられる。大村の合理主義である。